

# 末摘花は変貌したのか

——老女房との関係性から——

外山 敦子

## 一、これまでの研究状況

末摘花は常陸宮が晩年にもうけた姫君で、母とは早くに死別、父常陸宮の死後、源氏の女君の一人となる女性である。

この末摘花は、源氏の女君の中でも、醜女であるなど特異性に満ちた人物造型がなされている。

末摘花が、いわば女主人公として活躍するのは「末摘花」巻と「蓬生」巻の二巻である。「末摘花」巻では、末摘花が若い源氏の色恋の対象として登場、源氏の相手としては相応しからぬ不体裁を表出し、笑いを誘う。そして「蓬生」巻は、貧困の中の末摘花があわれをかもし出し、最後には源氏に救われ一件落着する。

ところで、この「末摘花」巻と「蓬生」巻の二巻では、そこに描き出されている末摘花像がかなり異なっていることが、以前から指摘されている。「末摘花」巻の末摘花は、見苦しい外見を持ち、趣味は時代遅れ、和歌も貴人の応対もできぬ不器用さが中心に描かれ、貴族社会の失格者とされるのに対し、「蓬生」巻の末摘花は、邸や調度品を手放さずに家を守り、叔母の誘いにも応じずに源氏を待ち続け、乳母子の侍従が去り、女房たちが非難しても耐え続ける強さが中心に描かれ、

高貴な貴族精神の保持者とされる。この点について、これまでの研究状況を簡単にまとめてみたい。

森一郎氏は、「源氏の須磨退居の折に見せた人々の心、そしてそれに対する源氏の対応という物語の構想の必然性の中で蓬生一卷が構想され」たとし、蓬生巻の誇りを失わぬ高貴な末摘花というのは「一時的変貌」で、「小主題の継起的展開による付着的造型」であるとされた。さらに森氏は、構想、主題のため便宜的に利用されるのが、源氏物語の人物造型の一方法であり、「作者の書こうとする構想、主題に作中人物がひきつけられすぎ、あまりにも主題に奉仕せしめられ、人物としての統一性をさえこわしてしま」っている<sup>(1)</sup>とされた。また室伏信助氏は、「末摘花」巻と「蓬生」巻の二巻では、作者の執筆態度に相違があり、二条東院に源氏の愛人を集める構想に随伴して、末摘花は反貴族的要素を捨象して、貴人として装いを改め、二条東院の一員として参加すべく「蓬生」巻が執筆されているとし、二巻間の懸隔は、その巻の主題を支える構想に規制されたものである<sup>(2)</sup>とされた。森・室伏両氏は、共に、二巻における末摘花に一個の人物としての一貫性がないことを認め、その原因として、二巻を支える主題や構想の違いを挙げている。

両説に対し、詳細に反論したのが山本利達氏である。山本氏は、二巻間の共通点を述べた上で末摘花の人物としての一貫性を主張し、変貌と見える「蓬生」巻の末摘花の相貌も変貌ではなく、「語り手の姿勢乃至は視点を変えた結果」で、末摘花に変化は起こっていない<sup>(3)</sup>とした。

このように先行研究は、二巻間の末摘花の描かれ方の相違について、末摘花の人物像に一貫性を認める説と認めない説の両説がある。しかしこれらの説は、末摘花の描かれ方の相違を、主題・構想や視点というような、物語世界の外側に要因を求める点において共通しているといえる。この問題に対し、物語世界それ自体の中に要因を求めることはできないだろうか。作品内世界に描かれる登場人物との対比、末摘花を取り巻く他者との関わりという観点から、末摘花の描かれ方の相違の要因を探ることはできないであろうか。

## 二、女房に対する末摘花の態度の変貌

作品内世界に描かれる登場人物との対比、末摘花を取り巻く他者との関わりという観点に立った時、果たして二巻間で末摘花の描かれ方に相違があるのだろうか。末摘花が一番緊密に関わっていた常陸宮邸の女房との関係から、末摘花の他者との関わり方を確認してみたい。

### (1) 「末摘花」巻——女房に従順な末摘花

源氏は、自分の乳母子である大輔命婦を仲立ちにして末摘花と結ばれている。しかし、やつとの思いで契りを交わしたものの、源氏は末摘花を物足りなく思う気持ちから、末摘花と一緒に過ごす夜を非常に長いものと感じていた。

からうじて明けぬる気色なれば、格子手づから上げたまひて、前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじう淋しげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、「をかしきほどの空も見たまへ。つきせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかえて見たてまつる。「はや出でさせたまへ。あぢきなし」「心うつくしきこそ」など教へきこゆれば、さすがに、人の聞こゆることを、えいなびたまはぬ御心にて、とかうひきつくりひて、ぬざり出でたまへり。

〔末摘花〕巻 ①三六五頁<sup>(4)</sup>

源氏は、いつまでも自分に打ち解けない末摘花に恨み言を言う。末摘花は、引つ込み思案で恥ずかしがり屋である。女房たちは、その末摘花に源氏の側へ出てくるように進言する。それに対して末摘花は「人の聞こゆることを、えいなびたまはぬ御心」の持ち主であるから、部屋の内からいざり出てきたというのである。引つ込み思案の末摘花は、源氏の側に行くのは恥ずかしいのだが、女房たちの勧めには逆らえない。ここには、自分の意には反するのだが、女房たちの意見に

は逆らうことのできない末摘花の性格が現われている。末摘花は、女房の進言を拒めない従順な性格の持ち主として描かれているのである。

(2) 「蓬生」巻——女房に対抗する末摘花

常陸宮死後の宮家は、心細い暮らしではあったが、思いもかけず末摘花が源氏の寵愛を得たことにより、暮らし向きは好転した。その後源氏が都を追われたことにより生活の援助が途絶え、常陸宮家は困窮の一端を辿る。元から荒れていた邸の内には狐や梟が住みつき、木霊なども出没する。そこで、宮家の女房たちは、我慢しきれずに末摘花に進言する。

まれまれ残りてさぶらふ人は、「なほいとわりなし。この受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて、案内し申さするを、さやうにせさせたまひて、いとかうもの恐ろしからぬ御住まひに、思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いとたへがたし」など聞こゆれど、「あないみや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわざはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み処と思ふに慰みてこそあれ」と、うち泣きつつ、思しもかけず。

〔蓬生〕巻 ②三一七頁

女房たちは、邸を受領に売却し、それを元手に住まいを移るよう末摘花に進言する。ところがそれを聞いた末摘花は、世間体を憚り、親の名残の残る邸を出ることに反対するのである。

邸を売却する許しを得ることができなかった女房たちは、次に常陸宮が残した調度品を売り渡して生計を立て直そうとするが、これも末摘花の許しは得られない。

御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうるはしきを、なま物ゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへる、とたづね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひ侮りて言ひ来るを、例の女ばら、「いかがはせん。そこそは世の常のこと」とて、取り紛はしつづ、目に近き今日明日の見苦

しさをつくろはんとする時もあるを、いみじう諫めたまひて、「見よと思ひたまひてこそ、しおかせたまひけめ。な  
どてかかろがろしき人の家の飾とはなさむ。亡き人の御本意違はむがあらはれなること」とのたまひて、さるわざはせ  
させたまはず。

〔蓬生〕卷 ②三一八頁

世間では、家が困窮したときに調度品を処分などして生活費に当てることは普通のことだとして説得する女房に対し、  
末摘花は主人として女房を厳しく諫め、自己の意志を貫いている。末摘花の意志とは、故常陸宮の遺志を守り続けること  
である。すなわち「蓬生」巻において、末摘花は、自己の意に反した女房の進言を退け、厳しく諫めることのできる自立  
性・主体性を持った主人として描かれているのである。

以上、「末摘花」巻と「蓬生」巻の両巻において、女房に対する末摘花の相貌は、対照的といつてよいほど異なった描  
かれ方がされている。「末摘花」巻の末摘花は女房に対して従順で、末摘花の行動の基準は自己の意志ではなく女房の進  
言であるのに対して、「蓬生」巻の末摘花の行動の基準は自己の意志であり、自己の意に反する女房に対しては厳しく諫  
めている。このように他者との関わりという点について見ても、二巻間における末摘花の描かれ方には変化があることが  
分かる。一体この変化はどのような意味を持つのであろうか。末摘花と女房との関係の変化は何を意味するのか。また、  
それが末摘花の一個の人間としての一貫性の有無にどのように関わっていくのか、次に探ってみたい。

### 三、常陸宮家の女房たち——老女房の特異性

末摘花と常陸宮邸の女房たちとの関係性を見ていくにあたり、常に末摘花の傍らにあって、常陸宮家の女房として仕え  
続けた彼女たちは、どのような特質を持っているのか確認したい。

まず「末摘花」巻に初めて登場する女房は、大輔命婦である。源氏は惟光の母である大式乳母を最も大事に思っていたが、その「大式のさしつぎにおはいたる」（「末摘花」巻 三四〇頁）左衛門の乳母という乳母がいた。左衛門の乳母には大輔命婦という宮中に出仕する娘がおり、この大輔命婦が常陸宮家に親しく出入りしていたことから、源氏は末摘花と出会うに至る。

大輔命婦は、末摘花の気性や容貌などをあまりよく知らなかったことから、末摘花のそば近くに仕える女房ではなかったらしい。そして、彼女は源氏との取次の役割を持つ「末摘花」巻で活躍するものの、「蓬生」の巻にははや登場しない。従って両巻を比較しようとする本稿の立場からは不要な人物である。

また、末摘花の乳母子として侍従という「はやりかなる若人」（「末摘花」巻 三五七頁）が登場する。侍従は常陸宮邸だけでなく齋院にも勤めに出ているため、源氏の来訪の折などの大事に宮家を不在にする女房である。齋院の死後は末摘花の叔母のもとにも出入りし、叔母の夫が太宰大式に任ぜられると、末摘花と離れ、叔母と共に都を出る。主人を捨て、主人を見限る乳母子として描かれる女房である。

さらに、常陸宮邸には、複数の老女房がいた（「老人ども」——「末摘花」巻 三六五頁・「ねび人ども」——「末摘花」巻 三七六頁など）。乳母子の侍従が末摘花のもとを離れ都を出たのに対比する形で、末摘花と離れられない老女房が描かれる。

年ごろ、わびつつも行き離れざりつる人の、かく別れぬることを、いと心細う思すに、世に用ゐらるまじき老人さへ、「いでや、ことわりぞ。いかでか立ちとまりたまはむ。我らもえこそ念じはつまじけれ」と、おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて、とまるまじう思へるを、人わろく聞きおはす。

（「蓬生」巻 ②三三三頁）

この場面は、他に行き場所がないにもかかわらず叔母の誘いを断り、そのために侍従も去っていった後の末摘花の心境を描いている。末摘花は、乳母子の侍従が去ったことを心細く思う。しかし末摘花の心境の中心は、「世に用ゐらるまじ

き老人」までもが自分のもとを去ろうと考えていることに置かれる。何の役にも立たないがゆえに、他に行き場所もないはずの老女房が去つていこうとするのは、末摘花にとつて、侍従が去つたことよりもつらいのである。他に行き場所のない末摘花と、彼女同様、行き場所を持たない老女房。両者は、常陸宮邸という場所では存在を認められない点において共通性を有する。そして末摘花自身も、自分と運命を共にする人物は老女房だという自覚を持っているのである。

常陸宮家の老女房は、女主人末摘花の運命共同体として常に近侍する女房集団の中核的存在だといえよう。しかしながら、末摘花にとつてそれは最も身近な存在ではありながら、所詮は（他者）である。一般に二者の比較の出発点は、両者の持つ共通点にあるが、運命共同体としての共通性を基盤に、両者はどのような関係性を展開していくのだろうか。

#### 四、末摘花と老女房——一体化と対照化の構造

##### (1) 「末摘花」巻の場合——末摘花と老女房の一体化

「末摘花」巻では、末摘花が源氏にその容貌を表出するまでにかかりの時間を要している。老女房は巻の初めから登場していた訳ではなく、源氏が末摘花という女君の核心部分に迫る段階、つまり末摘花の全貌が明らかになる直前に初めて登場する。隠されていた末摘花の全貌が明らかになることと、そこで老女房が初めて登場することは大いに関係がある。具体的にその場面を見ていきたい。

末摘花と一晚を共にした源氏は、手探りという手段では満足できなかつたため、末摘花の垣間見に期待をかける。が、末摘花の代わりに源氏が見たものは老女房の局であつた。老女房の局の様子は、源氏の目を通して細密に描かれる。

几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立処変らず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四五人ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々

食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶ひき結びつけたる腰つき、かたくなしげなり。さすがに櫛おしたれてさしたる額つき、内教坊、内侍所のほどに、かかる者どもあるはやと、をかし。

〔末摘花〕卷 ①三六三頁

まず源氏が見たものは、「いたくそこなはれたる」几帳や「秘色やうの唐土のものなれど、人わるき」御台といった老女房の局の調度品の類である。次に源氏の視線は、このような古びた調度品を使って食事をしている老女房の衣裳に移行する。「白き衣のいひしらず煤けたる」ものや、「きたなげなる褶」という使い込んで古びた衣裳を着た老女房の腰つき、「櫛おしたれてさしたる」額つき、という順に老女房の生活空間が明らかにされる。局の様子から調度品、女房の衣裳、髪型というように、視点が老女房に至るまでに、周辺の様子から順々に迫り、核心部である老女房をその中心に据えるところという構図を辿っているといえよう（最終的な核心部は末摘花である。このことについては後述する）。また、老女房に到達するまでの見窄らしい周辺の様子は、見苦しい老女房の容貌をより一層強調するモノの集合体としての機能を担っているともいえる。

源氏は、局に控える老女房を見て、「かけても、人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり」〔末摘花〕卷①三六三頁と驚き、幻滅してその場を立ち去る。このように古びて体裁の整わぬ女房が、王族の姫君の側近く仕えていることに幻滅したのである。源氏の幻滅は、老女房に向けられると同時に、召し使う側である末摘花にも向けられる。末摘花を垣間見しようとした源氏は、末摘花ではなく老女房を見るが、しかし結果として、老女房に対する源氏の評価は末摘花に移行していくのである。描かれる老女房により、描かれていない末摘花が評価されるという、老女房と末摘花の表と裏で一体化した人物関係がここにあらわれているといえよう。

老女房を垣間見した後、源氏は末摘花と一夜を共にする。翌朝、源氏は格子を自分で上げ、末摘花と一緒に空を見ようと勧める。源氏が「雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふ」〔末摘花〕卷 ①三六五頁のを、老女房たちは「笑み



さかえて」〔末摘花〕卷 ①三六五頁) 見、末摘花に源氏の側にいざり出るよう勧める。この早朝の場面で、源氏・末摘花・老女房の三人の人物配置に注目したい。まず源氏が格子の近くに、末摘花は源氏から離れて、おそらく几帳などに隠れ、部屋奥の奥にいたと思われる。それに対し老女房は、格子の近くの源氏と、几帳の奥の末摘花の間を取り持っているのだから、三人の位置関係は部屋奥から末摘花、老女房、源氏であろう。雪の光に映えた源氏は、老女房の位置からは見えたが、部屋奥の末摘花にはおそらく見えなかつただろう。雪の光に照らされた源氏の理想的な美しさを、末摘花が見ていない代わりに老女房が見、その姿に見惚れている。末摘花が見るべき夫の姿、末摘花が感動するはずの源氏の美しさを、末摘花ではなく老女房が見ているのである。ここで、末摘花の代わりに源氏を眺める老女房は、末摘花の身代わりといえよう。老女房は末摘花の身代わりを務め得ることで、末摘花と一体化しているといえる。

この早朝、源氏は末摘花の容貌を知ることになる。源氏に見惚れている老女房が「はや出でさせたまへ。」〔末摘花〕卷 ①三六五頁) と末摘花に進言をしたことにより、末摘花は部屋奥から雪の光差し込む源氏の側へいざり出たからである。今まで隠されていた醜女末摘花を源氏の前にさらしたのは、老女房の進言によるものであり、この老女房の一言が醜女を導いたといえよう。さらに醜女末摘花を導く人物は、老女房でなければならなかつたのである。

前日の宵の垣間見から始まった源氏の訪問は、これまで隠され続けた末摘花の全貌が明らかにになった早朝で終わる。源氏のこの日の訪問には、始めに「見てしがな」〔末摘花〕卷 ①三六三頁) という明確な目的があつた。宵の垣間見も、この目的のために行われている。源氏の目的は、早朝末摘花が容貌を現わし達成された。しかし、末摘花は突然早朝に姿を現わしたのではなく、前日の宵から徐々にその容貌を明らかにしたといえよう。前日の垣間見では、局の様子、調度品、衣裳、髪型の順に、周辺のものから徐々に中心に据えられた老女房に向かって視点が移動していた。それが翌朝になり、最終的な核心部分である末摘花に帰着したのである。従つて、末摘花が老女房に導かれて源氏に醜女をさらしたのは至極当然のことといえるだろう。また、前日の古びた調度品や衣裳、老女房の見苦しい姿は、すべて翌日の末摘花の醜い容貌

に繋がるものとして機能していたのである。

末摘花と一体化する老女房は、その直後にも見られる。年の暮れに、末摘花から送られた装束と和歌に対する源氏の返歌を、常陸宮邸では老女房が集まって見る場面がある。

御返り奉りたれば、宮には女房つどひて見めでけり。

〔末摘花〕巻 ①三七五頁

この一文のなかに末摘花は不在である。代わりに老女房が源氏の和歌を見て感心している様子が描かれる。源氏の返事を末摘花が見ていないわけはなく、「女房つどひて見めでけり。」という描かれた一文の内側に源氏の返事を見ている描かれない末摘花が内包されている。老女房が描かれることによって、描かれていない末摘花も周知のこととして読み手に理解されるのである。ここに、描かれる老女房と描かれない末摘花という、表と裏で一体化した人物関係が表われている。

ところで、この時末摘花が源氏に送った装束と和歌は、全く時代遅れで趣味が悪く、源氏を呆れさせた。しかし、常陸宮邸の老女房たちは、末摘花の贈り物が時代遅れであることに気付かない。

「かれはた、紅のおもおもしろしをや。さりともし消えじ」とねび人どもは定むる。「御歌も、これよりのは、ことわりに聞こえてしたたかにこそあれ、御返りは、ただをかき方にこそ」など、口々に言ふ。姫君も、おぼろけならでし出でたまひつるわざなれば、物に書きつけておきたまへりけり。

〔末摘花〕巻 ①三七六頁

この老女房の発言から、老女房たちは、自分たちの価値観に自信を持っていることが分かる。おそらく末摘花の贈り物にも、老女房の意見は十分に反映していたのであろう。そして、老女房の自信を持った価値観に促される形で、末摘花は自作の和歌を書き付ける。これは、老女房と同様に自身の価値観を肯定する末摘花の行為と受け取れる。従って、末摘花と老女房は、同じ価値観を共有しているのである。

(2) 「蓬生」巻の場合——末摘花と老女房の対照化

源氏の須磨謫居により、「蓬生」巻で常陸宮家は存亡の危機に陥る。宮家を襲った非常事態は、一体化していた末摘花

と老女房の關係性に大きな影響を与えている。

常陸宮邸の荒廢は、常陸宮家の存亡の危機の象徴として詳細に描かれている。その中の一場面を見てみたい。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。(中略) かくいみじき野ら敷なれども、さすがに寢殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず。つややかに掻い掃きなどする人もなし、塵は積れど、紛るることなきうるはしき御住まひにて、明かし暮らしたまふ。

〔蓬生〕卷 ②三三〇頁)

この場面の前半部は、使用人の住まいである「下の屋」の荒廢ぶりを描き、後半部は、末摘花の住まいである「寢殿」の不變を描いている。荒れまさる「下の屋」の変化と「寢殿」の不變は、対比の形式で描かれ、それぞれの住人である使用人と末摘花をも対比させたものと考えられる。

「末摘花」卷では、古びた貧しい老女房の局の様子は、老女房と一体化する末摘花の特質に直結していた。ところが「蓬生」卷では、荒廢した使用人の部屋は、末摘花の特質に直結しない。さらに、使用人の部屋に対する不變の寢殿が描かれたことにより、使用人とは対照的な末摘花の独自性が明確にされている。ここには、「末摘花」卷のような老女房と末摘花の一体化の關係はなく、両者の住まいが対比されることより、女房を含めた使用人と末摘花の対照化がはかられたものと考えられる。

源氏の訪れが途絶えた末摘花に、叔母が西国行きを勧めにやってくる。ここで、叔母の勧めに対して、末摘花と老女房の対応に相違が見られる。

「なほ思ほしたちね。世のうき時は見えぬ山路をこそは尋ぬなれ。田舎などはむつかしきものと思しやるらめど、ひたぶるに人わろげには、よももてなしきこえじ」など、いとよく言へば、むげに屈じにたる女ばら、「さもなびきたまはなむ。たけきこともあるまじき御身を、いかに思して、かく立てたる御心ならむ」と、もどきつぶやく。

この場面に末摘花は不在である。末摘花に向けられた「いと言よく」誘い出そうとする叔母の甘言に、老女房がなびいている。「末摘花」巻で、源氏の返事を老女房が見ていた場面には、描かれている老女房に描かれない末摘花が内在していた。しかし、この場で叔母の誘いに応じた老女房の背後に、末摘花はいない。「末摘花」巻のように、末摘花に向けられた叔母の誘いに応じた老女房が描かれても、それが末摘花の承諾には結びつかないのである。さらに、「さもなびきたまはなむ」という老女房の発言で、老女房はなびいたが、末摘花は依然として叔母の誘いを拒否していることが分かる。この老女房の発言は、老女房の意志の表明と同時に、老女房とは対照的な末摘花の描かれない意志をも表わしている。ここに、巧みな言葉になびき変化する老女房と、なびかずに不変を貫く末摘花との対照化が見られるのである。

## 五、末摘花造型の表層と深層

常陸宮邸の老女房は、外見が見苦しく、趣味が悪い。調度品や衣裳なども古びており貧しい生活を余儀なくされていた。「末摘花」巻で、この老女房が末摘花と一体化する。末摘花は老女房との一体化により、老女房の特質を自己の特質に転化させている。これにより、末摘花は外見が見苦しく、貧しい生活をし、趣味が悪いと源氏に笑われたのである。換言すれば、「末摘花」巻では、同じ特質を末摘花と老女房という二種類の人物が共有しており、二種類の人物が人物造型上同じ扱いをされているといえる。末摘花と老女房、二種類の人物の腑分けが明確でなく、両者が渾然一体となっているのが「末摘花」巻である。

「末摘花」巻の老女房の部屋。古びた調度品に貧しい食事、そこにいる見窄らしい老女房は、末摘花の特質に直結するモノの集合体であった。ところが「蓬生」巻で、その老女房の部屋は野分に遭遇し、喪失してしまう。それは、調度品や

老女房という、末摘花の特質を表わしていた集合体が、無くなったことを意味する。「蓬生」巻で、末摘花は、自身を造型していた集合体を喪失したのである。そして末摘花は喪失の代償に、今度は「うるはしき」寝殿を獲得する。寝殿の周りを取り囲む「廊」や「下の屋」は崩れて無くなり、中心の寝殿のみが変わることなく残る。つまり、末摘花という人物の周辺を取り囲んでいた老女房の属性・表層が剥がれて無くなり、末摘花本来の深層・本質が表面化するに至ったといえる。末摘花は、自身の特質として機能していた老女房が剥がされ捨てられたことで、初めて本質を表面化できたのである。さらに末摘花の表層の奥に隠された深層・本質とは何か考えてみたい。老女房よりもたらされた、古びた貧しい生活様式、趣味の悪さという表層に取り巻かれた深層には、一貫して変化を好まない、不変の心理に基づく信念が根付いている。

『伊勢物語』第十六段に、家運の傾いた貴族の話がある。

むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代のみかどに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にもにず。貧しく経ても、なほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。(後略)<sup>(5)</sup>

有常は心が美しく、品よく優雅なことを好む人柄で、他の人とは違っていた。従って、有常は家運が傾き没落しても、他の人のように権門にへつらい奔走するといった「世の常のこと」を知らないで、貧しい生活を余儀なくされたという。有常が「世の常のこと」を知らないのは、「心うつくしく、あてはかなることを好む人柄で」「むかしよかりし時の心」を持ち続けているためなのである。

末摘花の人柄も「ひたぶるにもづつみしたるけはひの、さすがにあてやか」(「蓬生」巻 三四二頁)で、「心ばへなど、はた、埋れいたきまでよくおはする御ありさま」(「蓬生」巻 三四四頁)と描かれる。末摘花の人柄は、『伊勢物語』の有常に通じるところがある。そして、常陸宮家も父宮の死後、没落し生活は貧しい。常陸宮家の生活が貧しいのは、有常同様、末摘花が「世の常のこと」を知らない為ではないだろうか。そして末摘花が「世の常のこと」を知らないのは、や

はり有常同様に、末摘花も変わらない心を持つ、変化を好まない性格だからだと考えられる。「伊勢物語」の有常と照らし合わせると、貧しい生活を余儀なくされている末摘花の深層に、不変を大事とする隠された内面性を確認出来るのである。

また、末摘花は趣味が悪いとされる。末摘花の趣味とは重々しく筋目の正しいものをよしとし、軽妙で洒落たものをよしとする源氏のそれと比較すると、末摘花の趣味は一時代前の美意識、つまり時代遅れということになる。旧来の美意識を尊重しつづける末摘花は、古のものを大事とする姿勢に貫かれ、ここにも不変を大事とする末摘花の深層が隠されているといえる。

「蓬生」巻は、「末摘花」巻で老女房という表層に取り巻かれ、隠されていた末摘花の深層が表面化する巻である。そのひとつの表徴として、「蓬生」巻になると、末摘花の特徴を端的に表わす語である「うるはし」が多用される。「うるはし」は、「平安時代以後の和文脈では、きちんと整っている、礼儀正しいという意味を濃く保っていた語」で、「相手の精神や行動がきちんとしているの意」として用いられる。その「うるはし」が、「末摘花」巻には一例も見られないのに対し、「蓬生」巻では四例が確認できる。ここに全用例を挙げてみたい。

a 御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうるはしきを……

②三一八頁

b うるはしき紙屋紙、陸奥国紙などのふくだめるに……

②三二二頁

c さすがに寝殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず……紛るることなきうるはしき御住まひにて、明かし暮らしたまふ。

②三二〇頁

d 今の世の人のすめる、経うち誦み、行ひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。

②三二二頁

a・bは、末摘花の使う調度品と紙に対して、cは末摘花の住む寝殿に、dは末摘花自身にそれぞれ「うるはし」が用

いられている。これらのどのような点が「うるはし」なのかを確認すると、aは、調度品の「昔様」な点が「うるはし」く、bは、「ふくだめる」紙の状態、即ち、古くなりければ立つた紙が、cは、部屋の様子も昔から変わらない寝殿が「うるはし」く、dは、現代人に流行している読経を恥ずかしがつてやらない、昔の人間である末摘花に対して「うるはし」が使われる。「うるはし」が用いられる状況に共通するものは、対象が、古から今に至るまで変わらず生き続けていることにある。「うるはし」は、古のものを大事とし、変化を好まない深層が表面化した末摘花を端的に表現するため、「蓬生」巻で初めて使われた語であるといえよう。

そして注意すべきは、「うるはし」という語が、末摘花には使われるが老女房には使われないということである。「末摘花」巻で、末摘花と老女房の造型には明確な違いはなく、渾然一体と描かれていたのを、「蓬生」巻は、末摘花に「うるはし」を用い老女房に用いないことで両者の差異を表わし、それぞれを別個の存在として分断している。老女房は、末摘花の表層の部分とは明確な差異が見られないものの、そこに隠された深層の内面性においては、やはり同一人物たり得ない。末摘花は王族の末裔、一家の主であり、老女房は彼女の一従者に過ぎないのである。

以上、「末摘花」「蓬生」両巻における末摘花の一個の人間としての一貫性を、老女房との関係から分析した。結論として、末摘花の表層とそこに隠された深層を描いた二巻間に、末摘花の一個の人間としての一貫性は貫かれており、山本利達氏の説と同じく、末摘花に変貌はなかったと考える。山本氏は、二巻間の変化を「語り手の姿勢乃至は視点を変えた結果」と結論付けられたが、それは換言すれば、語り手と末摘花との距離が変化した結果、つまり、作品内世界の外側に位置する語り手と、作品内世界の登場人物である末摘花との間の遠近法によるものではないだろうか。対して、本稿では二巻間の変化を、女主人公である末摘花と脇役老女房との心理的な距離が変化した結果、つまり、登場人物間の遠近法によるものと考え、山本氏とは位相を転換し考察を試みた。老女房との一体化の為に自己の表層のみしか描かれない末摘花の、隠された内面性を表に打ち出すためには、一体化していた老女房を放逐せねばならなかったのであり、その

ために「蓬生」巻では、末摘花と老女房の対立関係が描かれたと考えるのである。

注

- (1) 「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」〔国語国文〕第三十四巻四号 昭和四十年四月 『源氏物語の方法』所収
- (2) 「末摘花」〔解釈と鑑賞〕第三十六巻五号 昭和四十六年五月
- (3) 「作者の人間理解——末摘花を中心に——」〔源氏物語の探求〕第十輯 昭和六十年十月
- (4) 引用はすべて日本古典文学全集『源氏物語』小学館による。なお引用文の下に巻名と巻数・頁数を記した。
- (5) 日本古典文学全集『伊勢物語』小学館、一四七頁。
- (6) 「うるはし」は『源氏物語』全体で七十二例を数える。そのうち、人物の特色につながる形で用いられる「うるはし」は、五十例である。「うるはし」が最も多用される人物は夕霧(十一例)で、末摘花は夕霧に次いで多い(七例)。末摘花に用いられる「うるはし」を巻別に見ると、「蓬生」巻に四例、「玉鬘」巻に一例、「行幸」巻に二例となる。本稿は、「末摘花」「蓬生」両巻の比較という立場から、「玉鬘」巻と「行幸」巻の用例については、考察の対象から外している。
- (7) 『岩波古語辞典補訂版』(平成二年二月)

付記

本稿は、平成八年八月五日の古代文学研究会夏期大会において口頭発表したものに訂正を加え、改稿したものです。席上さまざまに教示を頂いたことに厚く感謝申し上げます。

(博士前期課程一年)